



働きがいにつながる 専門知識を得るための 場と機会をつくる

松尾クリニック(八尾市)・院長 松尾 美由起

職員の喜ぶ顔を見るのは非常にうれしいことであり、院長にとって診療の支えになるものです。なかでも仕事に対しての向上心が表情に表れ、眼が明るく輝くことはみんなのやる気を鼓舞します。ほめるということがやる気を引き出すということは解明されていますが、そのほめ方も重要です。たとえば女性の場合は「今日はキレイだね」という瞬間的な評価よりも「すごくいい仕事ができだね」と今までの過程を認めるほうがより効果があるといわれます。その意味でも、院内外で常に学び、実践する機会を設け、また教える立場にも立ってもらうことを大切にしています。

いかにスタッフの眼を輝かせるか考え、経験したことをご紹介したいと思います。

●知識欲を満たす

他職種から専門外の知識を得る

専門職が集まっている職場では他職種の考え方や知識の程度が非常に新鮮に映るものです。そこで、定期的に各部署から興味のある最近の情報提供してもらおうべく、朝礼で15分勉強会と題した勉強をはじめました。たとえば、医師からは「糖尿病の新しい治療薬」、看護部からは「フットケアの実際」、検査技師からは「心電図のとり方」など、もちろん事務部からは「身障手帳の話」など。一巡するのにだいぶ時間はかかりますが、みんなが自分の専門外のことに関心を持ち、さらに専門分野を活かすヒントとなるようです。

院外の勉強会等へ積極的に派遣する

さらに専門知識や技術を身につけてもらう機会を活かすことが重要です。たとえば、最近は糖尿病がかなりのピッチで増え続け、食事療法・運動療法・フットケアが重要です。となれば、フットケア学会での講演や実技へ派遣した

り、リンパ浮腫のドレナージの正しい方法で学んでもらうためにわざわざ府外専門家のいる施設まで泊まりがけで研修にいらしてもらうこともあります。実際に専門家のもとで指導してもらくと、実施のとき微妙な注意点がよくわかります。

同様に、慢性呼吸不全や間質性肺炎に「呼吸リハビリが重要である」と考えると、専門病院の講演に看護師たちと一緒に聴きにいき、さらにその技術を深めるために医療系大学の理学療法科の教員のもとに研修にいかせたり、来院してもらって実習を重ねてきました。

当院のヘルパーにもリハビリの講習会やケアの実習などにも参加してもらっています。

できる限り今旬の講演や実習にいらしてもらうことがやる気を引き出すきっかけとなるので、常に勉強会や講習の案内を掲示板で知らせています。

●院内勉強会を充実させる

新薬・新機械の説明をチームで聞く

新しい薬剤や、器具、呼吸器などの説明会や病気についての勉強会を充実させることも重要です。たとえば新しい糖尿病薬の注射薬が出たときなど、実物をもってきてもらって多くの職種が集まり説明を聞く機会をもつと、チームで医療をしているという気持ちを育てます。

患者教室で教える立場に立たせる

また、一方で教える立場になることも必要であると考え、糖尿病教室や禁煙教室などを患者さんに向けて行い、その担当者を決め育てることもあります。誰かに教えようと思えば自ずから最新の専門知識を得て勉強するものです。

患者さん向けの勉強会には調剤薬局の薬剤師も参加してインスリンのことなどを話してもらい、パートの栄養士に食事療法の実際を話してもらっています。実際に食事をつく

①院内勉強会(酸素吸入機の体験)



ってみると盛り上がります。栄養士がカロリー・糖類ゼロの甘味料を使ってケーキを作って試食してもらったり、おせちの注意事項など具体的に話してもらうこともあります。

最近では運動療法も楽しくないと長続きしないと考え、ボウリング教室を糖尿病の運動として取り上げた職員もいます。今まで軽度の片麻痺があり一度も経験したことがない方でも薬剤師や看護師に支えられながら楽しく運動できたことは医療にかかわるものとして非常にうれしいものです。

何事も一緒に具体的にという姿勢を示すことが意欲を生んでいます。

●事務職は常に患者さんの立場で考えてもらう

事務職は一番最初に患者さんと接するので、「自分の家族なら、あるいは自分が患者ならどうしてほしいか」を常に優先して考えてもらっています。たとえば患者さんとしてロールプレイをしたり、診察の流れに入ってもらって感想をきくようにしています。また訪問診療に同行し、在宅医療の実際や、療養している方の不便さ、経済状況などを知る機会をつくり、患者さんへの医療費の説明がいかに重要かを実感してもらうようにしています。最近では在宅医療導入時に患者さん・家族への説明に事務担当者が患者さん宅を訪問することもあります。

また勉強会に参加することで病気への理解も高まり、それに対するレセプトの重要性を知る機会となっています。

●朝礼では前向きな気持ちを引き出す

当院の朝礼はいろいろな報告事項のあとに、誰か一人に「楽しいことやいいことがあったこと」を話してもらいます。

②患者教室(糖尿病教室)



それを聞いて拍手すると全員の幸せ感が高まります。仕事のはじめに前向きな気持ちを引き出すことが大切です。

「常に誰が欠けてもよい仕事はできないのだ」という感謝の心を常に朝礼で伝えることも重要で、締めくくりとして当院の方針をみんなで唱和しています。

●患者さんに頼られる存在になる機会をつくる

当院の患者会の年に1回開かれる催しでは、スタッフにはボランティアで参加してもらっています。新しい医療情報を患者さんに伝え、その後患者さんたちとゲームや運動や音楽、ビンゴをして楽しむことは患者さんとの交流になり、患者さんの立場で考える機会ともなり、また患者さんに頼られる存在になりたいと実感できます。患者会でも介護の仕方や、介護保険の仕組みの話など、いろいろなことを専門職や事務職に担当してもらい話す場をつくるようにしています。

●いつもスキルアップを実感できる環境にする

ある10年目のナースがしみじみと「忙しい職場だけれど、常に刺激があり新しい技術や知識を得ることができるので、大きな病院で働いているのと同じようなスキルが身につけ遅れをとらないで働けるのがうれしい」と語ってくれました。

医院での勤務では最新の情報から取り残される、スキルアップができない、と不安に思う人も少なくありません。向上心のあるスタッフの期待に応えたいと考えています。

そして上記のナースのように、みんなが感じてくれるように環境を整備していくことが院長としての楽しみにもなっています。